
ばいばい十代僕のインド旅行記

中野 里美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ばいばい十代僕のインド旅行記

【Nコード】

N8312S

【作者名】

中野 里美

【あらすじ】

インドに行った話です。

高校を卒業して就職しいつの間にか十九歳になった。世の中のとが徐々にわかり始めてきて、人間関係なんかとうんざりし、なんだかいろいろ面倒になって会社を辞め、僕は旅に出ることにしたんだ。インドに。

と、いうわけでパスポートを取得して、観光ビザをとって、観光ビザの係りの女性が少し機嫌が悪いことに先行き不安になりつつ、エア・インディアといった一本で首都ニューデリーに飛べる航空券を予約した。ここまでくるとテンションは上がり、部屋にころがっていたバックパックに着替えと石鹸と歯ブラシと十万と南京錠とデジタルカメラと録音用カセットテープとMDと小説を積み込んで、僕は出発を待った。

八時間のフライトを終えて、僕はインドにいた。十一月のインドは観光シーズンでうだるような暑さだ。それに空港は汚いし、臭いし、インド人がいっぱいいた。とりあえず、金をインドの通過に交換してもらった僕は、空港からニューデリーの中心地まで行かなくちゃいけないので、外に出てオートリキシャといったナウイ乗り物を捕まえた。

「ニューデリーステーション！ ゴーゴー！」

と言うと運転手のおっさんは親指を立てた。僕は英語はからっきしだ。

ニューデリーの駅ではなんだか知らないけれど、インド人が腐るほどいて、チケットを買うための売り場に向かうまでに囲まれた。

なんだこいつら、いやホントになんなんだ！？ どうやら客引きらしかった。日本語でうるせえ！ あっちいけ！ と言うとインド人のテンションはなぜか上がった。腕を引っ張られて、体をもみくちゃにされて、僕はウンザリして走って逃げたら、後ろから頭を引っ叩かれた。

振り返ると痩せたインド人がいた。

僕はインド人に「ホワッツホワッツ？ ホワイホワイ？」と訊いたけど、他のインド人が再びあつまってきた、またもみくちやにされた。

なんで頭を引つ叩かれたのかよくわからなくて、僕はこれは死ぬなと思った。

でも、落ち着いて訊いてみれば、どうやら列車にテロがあったらしくて、かなりの人が死んだらしかった。そこで、列車はいま動いてないと言われた。

テロ。僕はシヨックを受けた。とりあえず、その日は適当なホテルに泊まることにしたのだった。資金に余裕があったから、シャワーと水洗トイレの付いているそこそこまともなホテルに泊まることにした。値段は三百ルピーだった（ールピーが四円くらいだ）。

翌日、駅にいくとやっぱり列車は動いていないらしくて、どうしようかと思つたら客引きが俺が連れて行ってやるみたいなのを言い出した。

そんでリキシャって乗り物で運ばれて、変な店で下ろされた。

そこは観光案内所みたいところで、どうやら動かない列車の代わりに車で隣の駅まで連れて行ってやるといった話らしい。列車は当分動かないよ。と言っていた。

「オツケーサンキューお願いします」

「じゃあお金、日本円で五万でいいよ」（英語らしきもの）

「そんなに？」

「観光シーズンだから。でもホテルは用意するよ」（英語らしきもの）

「はあ、オツケーいいよ」

「サンキュー」

で、車で隣の町まで連れて行かれた。

で、運転手にチップを要求された。

「二まん」

「まじで!?!」

「観光シーズンだから。インド人貧乏」(英語らしきもの)

「一万にまえてよ」

「わかった」

それで僕は運転手に一万払った。海外旅行は初めてで、前知識とかなかった。列車の事故で多少ボラれるのはしかたないとも思った。そこでホテルで寝た。翌日、そのホテルから出て、町をぶらぶら歩いていた。インドはほこりっぽくて、道路はリキシャとかオートリキシャで溢れている。

そんななか歩いていると、リキシャに服を引っ掛けられて破れたりした。せつかくだからと思つて裏路地みたいなところを通ると、インド人にぶち切れられた。

意味はよくわからなかった。

その町には何も無くて、とりあえず、目標のバラナシに行くために列車のチケットを買った。

そこではまたもや列車が止まっているらしかった。テンパる僕に韓国人カップルが教えてくれたのだ。英語がさっぱりわからなかったんだけど、韓国人の男性はメモに「火車 列車」って書いてくれた。僕はお辞儀をした。韓国人のカップルは心配そうに僕を見ていた。もう何がなんだかわからなかった。

観光シーズンだったのに日本人は全然いないし、テロだの、列車事故だの、ここはどうなっているんだと思つた。

僕はその駅で一夜を過ごし、翌日列車が来るのをまつた。

列車はきた。寝台車なんだけど、二段ベッドになっていて、僕は自分の座席に座った。まわりを見ると、そこには白人の女性やインド人が乗っていて、みんな自分の旅を楽しんでいるように見えた。そこにギターを持ったイギリス人っぽい男性がいた。僕はその人にインドのクソまずいお菓子をあげた。彼はそれを口にすると「オーマイガー!」と言って吐き出した。僕も「デンジャラスデンジャラス」と言った。仲良くなれたのが嬉しかった。

電車の旅は八時間ほどで、途中ベッドを組み立てて僕らは寝台についた。そこで少し小説を読んで眠ったのだけど、なんかゴソゴソ音がして目覚めた。

僕は二段ベッドの上段だったのだけど、下を見ると、覆面をしたインド人がいた。

「え、なに？」

彼は口に手を当てて「シー」と言った。僕は頷いた。

しばらくして、駅員みたいな人が来て彼はそこから連れていかれたのだけど、どうやら無賃乗車をしていたのだそうだ。アホか。

事故もなく僕はバラナシについた。そこは、ガンジス川のある活気のある町だ。とりあえずインド人にもみくしゃにされて、リキシヤでガンジス川まで連れて行ってもらった。

その汚つたない川では、インド人が沐浴をしたり、水牛が水浴びをしていたり、死体が流れていたり、ほとりでは沢山のインド人が日向ぼっこをしていた。ガンジス川はインド人にとっては聖なる川だ。ここで死んで灰になりガンジス川に流されれば、解脱できるらしい。でも犯罪を犯したり、自殺すると火葬はされない。そのまま川に流されて、解脱はできない。その人生感はずこしい悲しい気がした。でも、死体を火葬場まで運ぶインド人たちは笑顔で掛け声を出しながら走っていた。

僕はこの町が気に入った。ニューデリーのようにギスギスした雰囲気をあまり感じなかったからだ。

ホテルに部屋をとった。そこは一番安いところだった。資金が三万を切っていたので、少し節約することにした。その部屋は窓もなくてベッドと棚があるだけの簡素な部屋だった。ベッドはぶっ壊れていて穴が開いていたしノミが跳ねていた。トイレは共同のものがあり、そこにシャワーもあった。トイレは水洗の形をしているけど、バケツで流さないとクソは流れない。シャワーも冷水しか出ないし、すごく汚い。でも、なぜか居心地よく感じた。

バラナシについてから僕のモヤモヤは消えていた。

旅を楽しいと思いはじめた。なんだか、インドに慣れてきたみたいだった。ガンジス川のほとりをブラブラしていると、初めて日本人に出会った。

大学生で二十四歳だった。すごく親切な人で、僕は一発で好きになり、その人のホテルにお邪魔をした。ドミトリーで他にも日本人がいた。僕が一番年下で、みんな親切にしてくれたことにとても安堵していた。ここまでの経緯をみんなに話すと、ニューデリーのテロはたしかにあったけど、列車が止まっていたのは嘘だと教えてくれた。僕はカモられたらしかった。僕はインド人は宗教熱心で信心深い人たちだから、謙虚に接しなければいけないのかと思っていた。でも、そんなことはなかった。それがわかって気が楽になった。

僕がバラナシに来た目的はもちろんガンジス川で沐浴するためだった。パンツ一枚になって高台に立っていたら、インド人がわらわら集まってきた。僕はちょっとふざけてバク転しながら飛び込んだ。インド人は大爆笑していた。ここは本当に聖なる川なのかと思った。でも、それがいけなかった。

そのとき、ガンジス川の水をかなり飲んでしまった。ここに来るまでに、インドの真水を普通に飲んでいただけなんともなくて、平気かと思っていたら、ガンジス川はレベルが違った。とんでもない下痢に襲われたのだ。

それは、翌日の昼ごろにいきなり起こった。

観光客のいる通りをぶらぶらしていると、猛烈な腹の痛みに襲われた。公衆便所なんてインドにはほとんどない。あっても使いたくない。ホテルに戻るか微妙だった。我慢しながらホテルに戻ろうとしたけど、ホテルまでは一時間はかかる。無理だ。途中ガンジス川が見えた。僕は急いだ。ガンジス川では沐浴しているインド人がいた。僕は服を脱いでガンジス川に飛び込み、沐浴するふりをしてクソをした。クソは沐浴しているインド人に流れていき、インド人は川の水を口に含んだりしていた。そこで、僕に気が付いてニコリ

と笑った。僕はバレたら殺されると思って真剣に沐浴しているふりをした。

沐浴からあがるとスッキリしていて、ぶらぶらとガンジス河の散策をすることにしたんだ。体はインドの熱波にすぐに乾いていた。

途中の露天でバナナを買ってブラブラと持っていたら、後ろから猿に取られた。残った半分を食べながら歩き、途中で会ったインド人の子供にあげたりして仲良くなった。

彼らにこっちにこいと誘われてついていくと、木陰に聖者っぽい人が瞑想していた。子供が挨拶していたので僕も挨拶した。靴を脱ぐように言われて、脱ぎ、一緒に瞑想した。なにも悟りは得られなかった。

そんなことしていると、変な二人組みが現れた。パンツ一丁で、肩車をしている。たぶん意味はないのだと思う。僕はカメラを持っているかと訊かれて、差し出した。シャッターの押し方を教えると、彼らはその辺の風景を撮り始めた。

あれ、でもガンジス川って撮影禁止じゃなかったっけ？

で、俺を撮れみたいにカメラを僕に返した。笑顔だった。まだ肩車をしていた。撮った。満足してどこかに行ってしまった。

僕もまた歩きだした。

ガンジス川。日が落ちときの光景は、やっぱり雄大だった。

なんだかインド人が騒がしくなったと思ったら、どうやら祭りが行われるらしかった。ガンジス川のほとりに大きな舞台が設営されて、雰囲気がとても明るいものになっていった。

なんの祭りかはさっぱりわからないけど、盛大に音楽がかけられて、ヘリコプターまで飛ぶ始末だった。僕もそこにいたんだけど、インド人のテンションが高すぎて、ビビりまくった。ガンジス川のほとりはインド人で埋め尽くされて、みんなわけのわからない踊りを踊ったりモゾモゾしたり、叫んだりしていた。楽しそうだなによりだと思い僕はホテルに戻った。

僕はバラナシを離れることにした。

インドにはいろんな人が集まっていた。なかにはマリファナ目当ての人もいたりする。人それぞれ楽しみ方があるし、ここは日本じやなかった。そりゃ大麻はどっちにしる犯罪なのだけど。でも、それはそれでオツケーだと思えるほど、この国は雄大だった。

列車のチケットを買って、ホテルに戻った。

もう空港のあるニューデリーに戻るうかと思ったのだけど、その前に行くところがあつた。ムンバイといった町だ。

列車でムンバイに着くと、適当にホテルをとつた。そのあと、オートリキシャに乗ってガンジীর記念館を見にいった。

もともとインドにはガンジীরマザーテレサの本や映画を観たから行くこうと思つたんだつた。マザーテレサが感じたことや、ガンジীর見たものを僕も見たいと思つた。

ガンジীর記念館を出たあと、リキシャのおっさんに連れていかれるまま、広い公園に連れていかれた。

そこは遺跡のある落ち着いた感じのところだつた。お礼にリキシャのおっさんにチップを多めに渡したら、ものすごく喜んでくれた。僕に手を合わせて笑顔で去つていった。なんとなくへミングヴェイの日がまた昇るを思い出して、すこし気分が明るくなつた。

インドはカースト制度は廃止されてるけど、経済はまだ発展途上だ。多くの国と同じように混合経済と呼ばれる政策をとつていて、それは社会主義と資本主義をまぜたような政策だ。だがインドの場合、政府が経済に加担する割合が大きい。徐々に多くの企業が民営化しているらしいけど、貧困はなくならない。

公園の遺跡みたいなところに腰かけていた僕に子供の乞食が近づいてきた。その子はピエロみたいな化粧をしていて、バク転をしたり、へんな踊りを踊つた。そしてバクシーシと言って手を出した。

もちろん、こんなことはインドじゃしょっちゅうあるし、聞いた話によると、バクシーシをもらうために手足を切断する人もいるら

しい。実際にそんなインド人もバラナシでみた。

彼はバク転とか、踊りとかしてバクシーシを貰おうとしてきたから、どこかに親とかいるのかもしれない。練習してるのかもしれない。わざと汚い服を着ているのかもしれない。

でも、六歳くらいの男の子はたしかに必死で、僕はなぜか泣きそうになった。

僕はポケットからお金をつかんで渡した。

彼は驚いていたけど、僕に手を合わせてお辞儀をして走っていった。

僕は日本に帰ることにした。もう少し旅は続けたかった。資金をもっと用意すればよかったと後悔した。すでに二万を切っていた。

それを他の人に言ったら、まだまだ余裕だと言われたけど、僕は進む勇氣はなかった。

ニューデリーへの帰りの列車では日本人と一緒に席だった。他にも色々な国籍の人がいて、インドで見つけたクソまずいお菓子をあげると、やっぱり「オーマイガー！」と言って吐き出した。まじでマズイのだ。

ニューデリーかと思って降りた場所は全然知らない町だった。

そのこの町は静かで、まだ昼だったから少し散策した。子供が僕を見て手を振ってきたりした。僕も手を振り返すと、笑っていた。

そこから駅に戻ろうとしてリキシャに乗っただけで、そのリキシャの運転手は僕を勝手にバス乗り場へ連れて行きやがった。どうやらニューデリーに行くならこのバスの方が早いつてことらしくて、僕はもう疲れていたし、面倒くさくてそのバスに乗った。

でも、バスの旅はけっこう楽しかった。インド人しか乗っていないくて、ピーナッツをボリボリ食っているインド人が僕にピーナッツを分けてくれた。殻が服にたくさんくっついていて。僕もインドのクソまずいお菓子をあげたら、かれは美味しそうに食べていた。

ニューデリーに着くと、僕はとりあえずホテルにチェックインし

た。余りの金を使ってしまえと思っていい部屋をとった。

帰国の日、僕はぎりぎりまでインドを見ておこうと思ってホテルを出ると町を散策した。

小さい路地に入って生活している姿を見たいと思ったのだ。僕は帰りの資金をジーパンのケツポケに入れてたんだけど、そこでスリにあった。全然気が付かなかった。スリにあったのは日本円にしたら三千円くらいだけど、かなり困ってしまった。

空港までは歩いてはいけなくて、最低でもオートリキシャを使わないといけない。

日本人を探している余裕はなかった。フライトまでそんなに時間はないのだ。

仕方がないので、オートリキシャのおっさんにソニーのカセットテープと交換で連れて行ってくれと頼んだ。

「マネーロスト！ なくしたんだって！ 交換！ これあげるから空港まで連れて行って！ エアステーションまでプリーズ！」
身振り手振り。おっさんは首を振った。

意外と反応が薄くて。五人目でようやく連れていってくれる人を見つけた。ぶつぶつ交換は普通だつて聞いていたのに、その人たちはなぜか嫌がる人が多かった。

僕はなんとか空港について、飛行機に乗った。日本についた。駅員に事情を説明して、お金を借りてアパートに帰ってきた。

僕は日本に慣れるまで三日かかった。

僕の旅はほんとうにグダグダで、結局たいした経験もできなかった。もっと上手に旅をする人はいるし、実際にそんな人からいろいろな話しを聞かせてもらったりもした。けれど、僕はまたインドに行きたいと思う。もっといろいろな経験をしたい。

年が明けてしばらくし、僕は二十歳になった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8312s/>

ばいばい十代僕のインド旅行記

2011年4月29日16時25分発行